

【報告】

中国語入門一步前—初級中国語の導入授業の記録—

One Step before Elementary Chinese :

A Note about an Introductory Lecture for Elementary Chinese Class

川口 喜治

Yoshiharu KAWAGUCHI

はじめに

本稿は、論者がここ数年、中国語初級クラスの第1回目に行なっている導入授業の内容を整理し、導入授業の一例として提示するものである。対象となる学習者は日本語を母語とする大学生を想定している。

日中両国間の交流が隆盛し、日本の大多数の人々にとって中国語や中国文化が日常レベルで馴染みのあるものになってきてはいるが、やはり中国語学習を本格的に開始する者にとって、中国語クラスで教授される言語（現代中国語）がどのようなものであり、どういった点について注意をしながら学習を進めていけばよいのかは、説明が必要であると考えられる。この点、中学校における本格的な英語学習にあって、学習対象としての英語という言語自体について説明がなく、いわば自明のように学習が開始されるのとは違っている。

本稿の論述においては、本稿末尾に掲げた参考文献に拠るところが多い。それらの文献の記述内容は、通説となっている事柄がほとんどであるので、いちいちの注記を省略する。プライオリティーは、それらの文献や論者が目撃していない文献も含めた先行研究、先行教育に存在する。ただ本稿では、論者の中国語「学習」経験と「教授」経験から得た、中国語教育や外国語教育における論者なりの方法、さらには論点をいささかなりとも提示したつもりではある。

畢竟、本稿は現時点で論者が至った初級中国語の導入授業の記録として書かれるものである。



1. 導入の導入

以下、本稿に記録する導入の授業はプレゼンテーションソフトを用いた説明によってなされている。

まず冒頭のスライド1においては、日本のみならず世界において人気を博す中国の動物であるパンダを登場させる⁽¹⁾。これは、学習者の興味・関心・意欲を生起させ、中国世界に引き込むことをねらいとしている。この時、ジャイアントパンダが中国語では大熊猫と表記されることを示し、自明の如くであるが「大」がジャイアント、そして「熊猫」がパンダを意味することを説明する。このとき派生的に「龍猫（トトロ）」の例を示すと、「猫」が必ずしも私たち日本人がイメージする小さなネコ（cat）だけに用いられる語ではないことが説明でき、日中の言語文化の差異の一例を示すことができるであろう⁽²⁾。また発音原理や規則を全く教えないままで「dà/xióng/māo」と学習者に発音させることにより、中国語学習空間に突入したことを学習者に自覚させることができよう。

次にスライド2の導入授業のタイトルである。「中国語



入門の入門」という些か奇妙なタイトルを敢えて中国語に置き換えれば「初級漢語入門」となるであろうか。ここでは簡体字についての説明はしないまま、中国語タイトルと論者の所属氏名を示し、中国で現在使用されている漢字が日本のそれとは異なっている（ものもある）ことをあらかじめ予告しておくにとどめる。このことにより、中国語は、日本語と漢字使用という点で共通しているから習得が容易であるという安直な通念を払拭する効果が期待できると判断される。

中国語を学ぶ目的は、何？

何のために中国語を学習するのか？

3

が提出されるかもしれないが、クラス全体が一つの決まった学習目的（シラバス上の科目の到達目標ではない）を持つ必要はないのであり、むしろここではその多様性を包括的に共有することが重要であろう。

→中国を知るため

①中国を旅行する

・通訳に頼ったり英語を使ったりするよりは、現地のことばで話す方が、おもしろい。

②中国の人たちと交流する

・日本人は中国語を学び、中国人は日本語を学ぶ。

→相互交流

③文化・社会・経済・政治などを知る、研究する

・日本語による翻訳文献で知るのではなく、中国語文献（原典）によって知る。
→翻訳によって紹介される文献は、限られている。翻訳には間違いが付きもの。

★自分自身による中国理解を目指す。

4

ろう。

ただ、大学教育において留意しておくべきことは、本来の外国語学習はここに挙げたことを最終目的とするものではないということである。内田樹氏の次の発言は現今の「グローバル化対応のための学習」の一環としての英語学習に一石を投じた重要なものであるので、少しく長くはなるが引用しておく。

外国語の学習というのは、本来、自分の種族には理解できない概念や、存在しない感情、知らない世界の見方を、他の言語集団から学ぶことなんです。……（中略）……

理解できない言葉、自分自身の身体の中に対応物がないような概念や感情にさらされること、それが外国語を学ぶことの最良の意義だと僕は思います。浴びるように「異語」にさらされているうちに、あるとき母語の語彙がなく、その外国語にしか存在しない語に自分の身体が同期する瞬間が訪れる。それは、ある意味で、足元が崩れるような経験です。自分が生まれてからずっとそこに閉じ込められていた「種族の思想」の檻の壁に亀裂が入って、そこから味わったことのない感触の「風」が吹き込んでくる。そういう生成的な経験なんです。外国語の習得というのは、その「一陣の涼風」を経験するものだと僕は思います。「英語ができると就職に有利」といった「手持ち」の理由で外国語を学ぶ人たちは、どれほど語彙が増えても、発音がよくなっても、自分の檻から出ることができない。

（『街場の文体論』第12章「意味と身体」「言語は道具ではない」）⁽³⁾

論者は、内田氏の発言に左袒する。してみると英語が実質的に世界の共通語^{リンガフランカ}となったがゆえに、かえって英語を母語とする人々が母語ではない言語を習得しようとしなければ、それは、文化的に極めて不幸な状態、「生成的な経験」を経験できない状態であると言わざるを得ない。

むしろ論者は、「言語のグローバル化」を究極にまで推し進め、英語母語以外の人々が、すべて自らの母

語と英語 (World Englishes) を話せるバイリンガル (マルチリンガル) の状況が出現すればよいとさえ考
 えている。その時、英語は、英語しか運用できない人々以外の世界の人々にとってオルタナティブの言語と
 なり、更には自己の言語、思考、文化の枠組みを相対化するための装置となる。逆に英語のみしか運用でき
 ない人々はそうではないという点で、不幸な立場に置かれるのである。そして同時に英語運用能力を持つ
 という特権性は消滅するのであり、かつての「Queen's English」のような正統 (雅) な英語という地位も
 「World Englishes」の中に葬り去られるのである。

3. 大学で学習する「中国語」とは1-中国語ということば-

周知の通り、日本においては中学校・高等学校において「漢文」の学習が実施され、大学入試センター試
 験にあっても「国語」の一設問として「漢文」が出題される。学習者たちはもとより「漢文」が日本語ではな
 く中国の言語であることを知っているが、何ら説明もなく「国語」教科として学習する奇妙な状態に置かれて
 きたのがほとんどである。また論者は、大学入学当初、中国語クラスでは高等学校の「漢文」を教授されるも
 のだと勘違いしていた (現在はそのような学生は少ない。当時も論者だけであった可能性もなくはない)。

このような点を踏まえて、大学で学習する中国語について、中国語という概念をいったん白紙に戻し、反
 省的に確認する必要があると考えられる。

ここではまず、「中国語って中国語?」という奇妙な問いかけを端緒とし、「中国語」という語彙が中国
 語には存在しないことから説き起こすことにする (スライド5)。

中国語って中国語?

中国語という単語は、
中国語にはない。

中国語は、
中国語で何と呼ぶの、何と書くの?

5

①**中文、中国話**
= 中国のことば
・各国語の中の一つとしての中国語、
外国語に対する中国語。

②**漢語、漢文**
= 漢民族のことば
中国人 (漢民族) は
自らの言葉をこう呼びます。

6

スライド6に示したように、日本語の概念における「中国語」は、中国語においては①「中文」「中国
 話」、②「漢語」「漢文」と表現される。もとより両者は等質ではなく、①が「中国のことば」であり、②
 は「漢民族のことば」である。しかし一般的には、中国語といえば漢民族のことばを意味するといつてよく、
 ①≒②の関係が成立している。

ここではじめて学習者には、漢民族の用いることば (文) であるから「漢文」なのであるということ、つ
 まり高等学校までに学習した科目が何故「漢文」と呼ばれていたのかが理解されることになるだろう。

また補足的に、漢字を「漢字」と称する理由は、「漢」民族が使用している文「字」であるということ
 を説明すると、「漢」=漢民族という関係性が学習者にはより明確に理解されよう。

さて次には、上記のような通念が普遍化している背景について説明することが必要になる。スライド7の
 ように、中国には56種の民族が生活しており、漢民族はその一種族に過ぎない。にも関わらず、何故「中国
 のことば≒漢民族のことば」という関係が成立しているのかを、学習者に問いかけ、大学入学までの知識や
 経験によって回答させる。

その理由を要約すればスライド8のようになろう。漢民族に分類される人口が、中国の総人口14億の92%
 である約13億人と、他の55種の少数民族⁽⁴⁾に対して圧倒的な割合である。つまり、中国に生活する圧倒的
 多数の人々が漢民族であり、漢民族の言語である漢語・漢文を母語として日常的に使用しているという現状
 がある。そして中国の歴史や文化の主人公となっていたのは漢民族であり、一般的に認識されている中国世界
 とは漢民族世界であると言ってよいであろう⁽⁵⁾。

中国には、
56の民族が住んでいます。
それぞれの**民族は、それぞれの文化や言語**を持っています。

56の民族のひとつに過ぎない漢民族の言語を、中国語と呼ぶのでしょうか？

7

漢民族

総人口(14億)の92%(約13億)であり、漢民族のことばが中国を代表する言語となります。
ちなみに、漢民族の居住領域は、国土の約40%です。
中国の歴史や文化を築いてきたのも、主に漢民族です。

8

大学で学ぶ中国語は、漢民族の**使用している言語、すなわち、漢語(漢文)**です。
これからは、漢語を中国語と呼びます。

漢民族以外の55の民族は、人口が少ないので、**少数民族**と呼びます。

9

極めて乱暴な考え方ではあるが、民族という概念を自明の前提とするならば、一般的に民族を区別する指標の一つとして言語が存在する。つまりそれぞれの民族は、それぞれ独自の言語を所有している。「中国」のことばである中国語の授業において、「漢民族」のことばである漢語・漢文を学習するのは、中国において漢語・漢文が圧倒的に多く使用されているからである(スライド9)。中国内外において中国人と中国語でコミュニケーションをとるときは、漢語・漢文が共通語的に通用するのであり、少数民族の言葉はその役割を持たないのである。

なお以下、本稿においても授業においても、漢語・漢文を中国語と便宜的に呼ぶこととする。

ここで学習者に対しては、中国に居住している55種の少数民族を差別したり無視するのではなく、極めて実用的な理由から、漢語・漢文を学習するということを知らせておくべきであろう。併せてもし少数民族の社会や文化などについて知りたい、研究したいと考えるならば、その民族の言葉を習得することが極めて有効な方法であることも伝えるべきであろう⁽⁶⁾。

しかし上記の論者の説明には等閑視できない問題が存在している。「中国語」という概念は、果たして言語の概念として妥当であろうかということである。先に、ひとまずの前提として、言語は民族を区別する指標であるとした。それに従えば、中国語は「中国民族のことば」ということになる。しかし「中国民族」という範疇は存在しない。中国は、私の考えでは、まずはじめに国家の概念である。

つまり本節において、ここまでの回りくどい記述が必要とされたのは、ひとえに中国という国家の概念を言語という概念の説明に持ち込んできたことに起因するのである。試みに『現代漢語詞典修訂本』(商務印書館、1996年)の定義を覗いて見よう。「中文」は「中国的言語文字、特指漢族の言語文字。」、「中国話」は「中国人民の言語、特指漢語。」とされている。これらから明らかなように、「中文」「中国話」が「漢語」を包摂する関係になっている。この定義、考え方は、漢語=中国語とは断言していない点で、一見、少数民族とその言語にも配慮した平等公正なものであるように思われる。しかし、注意深く観察すれば、この定義は逆にそれらの少数民族を「中国」「中国人民」の範疇に取り込んでしまおうとする国家主義的な危険性も孕んでいる可能性があると考えられまいか。おそらく少数民族の人々は自らの言語(母語)を中国語であるとは考えていないであろう。

上記の中国語にまつわる国家と言語の問題は、初級中国語の導入の範囲からは逸脱し、学習者に対しても混乱を来たす可能性が大きいので、実際の授業において論者が言及することはない。参考までに『漢字百科大事典』という大部の事典の「中国語」の定義を引用してみよう。「最も広義には、シナ・チベット語族のなかで、漢民族を中心に用いられ、一音節一義一字を基本条件とし、漢字を文字とする孤立語の言語を指す。最も狭義には、現在大陸中国で普及し定着しつつある標準語、いわゆる「普通話」を指す。」(傍点・論者)⁽⁷⁾。広義・狭義に亘って、「中国語」と「漢語」を全く同じものとして扱っている。日本では、これが

普通の考え方であるとしてよいのだろう。ただ、繰り返しにはなるが、論者の立場としては、「(国家としての) 中国」の言語 = 漢民族の言語 + 少数民族の言語、漢民族の言語 = 各方言 + 普通話となる。

4. 大学で学習する「中国語」とは2 - 漢語について -

中国語(漢語)には、時代的に見て大きく2種類があります。

①現代中国語

・現代の中国で話されている、
言文一致(話し言葉と書き言葉がほぼ同じ)のことばです。

②古典中国語

・皆さんを悩ませていた「漢文」の教科書に出てくることばです。

10

大学では**現代中国語**を学習します。

現代中国語には大きく分けて七つの方言があります。

七大方言と呼びます。

○北方方言(官話方言、広義の北方語): 北京語に代表される。大部分の地域。
○吳方言: 蘇州や上海の方言に代表される。上海周辺、浙江
○湘方言: 湖南
○贛(かん)方言: 江西・湖北
○閩方言: 福建、広東(東部)、台湾、福州、廈門、汕頭、文昌などの方言。
・漢然と「福建語」と呼ばれている。
○客家(はっか)方言: 広東、福建、四川などの華南各地に散在、梅県が代表的。
○粵方言: 広東(中・西南部)、広西(東南部)

11

大学で学習する中国語が「漢民族のことば」であることを示したあとは、「普通話」にたどり着くために、次の説明が必要となろう。以下の記述は学術的には極めて大雑把なものとなることを了承されたい。

スライド10に示したように、中国語には「現代中国語」と「古典中国語」の区分が存在する⁽⁸⁾。古典中国語については、学習者が高等学校までに学習してきたいわゆる「漢文」であると説明すれば最も理解が容易であろう。そして古典中国語は、現代中国語のような言文一致の言語が誕生するまで、主に清朝以前において、統治者階層である一部の知識人のみが特権的・排他的に運用してきた書きことばであるということを補足的に説明すればよいであろう。そして、大学における中国語の学習は高等学校までのいわゆる「漢文」とは異なり、現代中国語を学ぶものであることを確認することが肝要となる。

現代中国語は、文字通り、現代において中国で使用されている中国語(漢語)である。一口に現代の中国語と言っても、膨大な版図に分布して居住する漢民族が生来的に等質の言語を母語としているはずはないことは学習者たちにとっても容易に想像しうる。いきおい次には、方言の説明が必要となる(スライド11・12⁽⁹⁾・13)。

周知の通り、中国語の方言地図は特に南方において複雑になっており、北方方言と広東語に代表される南方の方言とでは、口頭でのコミュニケーションを行なうことがたいへん困難である⁽¹⁰⁾。ここで学習者に対して、このような言語状況にある広大な中国において、コミュニケーション、特に口頭におけるそれを潤滑に行なうには、どのような解決策があるか、質問を行なう(スライド14)。

中国言語地図(中国方言地図)



12

北方方言と南方の方言は、
表記は漢字を使う点では同じですが、
同じものを表わす語彙が
異なっていることもあります。

それ以上に、同じ漢字の発音が、
外国語と言っているほど、違っています。

13

現代の日本においては、各地方から集まった大学生たちが、口頭によるコミュニケーションに困難を来たすことはほとんどない。学習者には、その視点から、この問いへの回答を促す。

この問いに対して、学習者は多くの場合、「共通語」の存在に気付く。現代の日本は、明治以来の学校教育の充実・完備と、近現代における様々なメディアの普及などにより「共通語」⁽¹¹⁾が100%と言ってよいほどに普及しており、日本国中のどこにあっても日本語によるコミュニケーションが困難となることはない。

中国においても、近代国家としての統一を成し遂げるためには、共通語の存在とその教育・普及が必須であったことは間違いない。周知の通り、国民国家となる必須条件の一つが、共通語（言語の統一）なのである。

この段階で初めて、学習者には、大学で学習する中国語が現代の中国で使用されている漢民族のことばの共通語であることが明らかにされることになる（スライド15）。

こまりましたね！
漢民族の人たちの間でも、
北方の人と南方の人が会話する
とき、
通じないということになります。
筆談するの？

どうすれば、良いのでしょうか？

考えてみてください！！

14

共通語が必要です。
中国語では「普通話」といいます。
「普通」とは普遍的に通用するという意味です。

皆さんが、大学で学習するのは、
この共通語「普通話」なのです。

中華人民共和国(1949年～)が
成立した後、
本格的に共通語の作成と普及の
ための教育が行なわれるようにな
ります。

15

5. 中国語学習の関門—簡体字と拼音字母—

いよいよ、中国語学習の第一の関門である簡体字と拼音字母について説明する段階である。

まず前提として、中国が識字教育において、伝統的な漢字（繁体字）を簡略化した文字（簡体字）を公式な文字として、またアルファベットによる発音表記を取り入れた背景を説明する。理由はやはり乱暴ではあるが、スライド16のように圧倒的多数の文字とは無関係であった人々に⁽¹²⁾、効率的な識字教育をする必要に迫られたからと考えてよいであろう。当然のことではあるが、文字とは無関係であった人々も口頭言語の使用は可能である。しかし自らが使用している口頭言語を文字に置換する能力（識字能力）をほとんど有しておらず、この能力を中国全土で同じ水準にするためには、覚えやすく書きやすい簡体字が要請されたのである。

しかも前節で述べたように、文字に置換できたとしても、その発音が方言のままであったならば口頭での普遍的コミュニケーションは成立しない。そこで一つの漢字に対して同じ発音を用いる統一的教育が必要とされたわけであるが、発音の表記は、国際音標のような発音記号では、またそれが台湾の注音字母であっても、教育、特に初等レベルではその複雑性ゆえに困難であることは明白であり、アルファベットが採用されたのである。以上のような旨をここでは学習者に説明する（スライド17）。

中華人民共和国成立当時、
文字の読み書きができる人口は、
おそらく全人口の1割にも満たなかつた
と推測されています。
つまり中国の多くの人々が
文盲であったわけです。
そのような人々に漢字の読み書き、
共通の発音を教育するには、
工夫が必要となります。

16

そこで考え出されたのが、

- ①簡体字(かんたいじ)
・簡略化した漢字
- ②拼音字母(びんいんじぼ)
・アルファベットによる発音記号

これらを紹介しながら、
中国語について、
少しだけ紹介していきましょう。

17

6. 簡体字の紹介

簡体字の紹介は、実例を挙げ、プレゼンテーションソフトのアニメーション機能を使用してクイズ形式で行なうのが楽しくてよいであろう。ここでよく引き合いに出される例であるが「骨」が「骨」の簡体字であ

ことも紹介すると、二画を一画にしたという可能な限りの簡略化の努力が説明できるであろう。同時に学習者には、共通に漢字を使用する日本・中国であっても、使用する漢字が異なっていることを確認させることができるであろう。

簡体字

漢字は中国から伝わりましたが、日本でも、中国でも、本来の字体を簡略化して使用しています。特に中国では、「簡体字」という極めて簡略化された漢字が使用されています。

18

ここでクイズです、次の**簡体字**は、日本では何という漢字でしょうか？

说 广 轻 职业 药 际 骨
説 広 軽 職 業 薬 際 骨

骨も簡体字？

よーく、見てみましょう。

19

7. 拼音字母・母音・子音の紹介

まだ本格的な中国語学習に入っていないので、前節の簡体字同様、拼音字母についてもごく簡単に紹介する(スライド20以下)。スライド21では、敢えて極端な説明をしている。ここでは単母音を例にしているが、「a」「o」「i」「u」の発音は、正確には日本語のそれとは異なるが、極めて日本語に類似する。しかし「e」「ü」「er」の発音は原則的に日本語(母語)には存在しない。ここで、外国語の発音学習の要諦は母語(日本語)にはない発音に一等注意をしながら訓練することであると学習者に力説する。これは中国語のみならず、全ての言語の学習に普遍的に通用するものであると考える。ここでは、「e」「ü」を採り上げて学習者に練習させ、日本語にない発音であることを実感してもらおう。あくまでも本格的学習の導入であるので、学習者個々の正確な発音を訓練することは目的としない(スライド22)。

ただ学習者には発音のしにくさを実感してもらおうことが大切である。またローマ字表記に慣れてしまった日本の学習者は、本格的学習開始後も拼音字母をローマ字読みしてしまうことも多いので、最も混同しやすい一例として「ian」「iang」/「イエン」「イアン」の違いがあることを説明し、拼音字母はローマ字読みとは違うことを認識させておくことがよいであろう(スライド23)⁽¹³⁾。

拼音字母 母音(韻母)1

単母音

a o e i u ü er

複合母音

ai ei ao ou

ia ie ua uo üe

iao iou uai uei

20

外国語の発音の学習において、大切なことは、母語(日本語)にない発音に特に注意をしながら、練習し身につけることです。

中国語の母音で日本語にない発音は、おおざっぱにいうと、緑色の3種類 a、o、e、i、u、ü、er

21

子音の紹介においても、母音同様、日本語の発音においては意味の示差的特徴とならない、無気音・有気音があることを中心に説明する(スライド24・25)⁽¹⁴⁾。また、そり舌音を中心に、日本語にはない子音の発音が多く存在することを学習者に注意させることが適切であろう。

日本語と中国語の比較のための挙例としては明解であるならばどのようなものでもよいと考えるが、スライド26は日本語における「ポット」を例にしている。「ポ」を有気音で発音した人がいて「ポットを持って来て下さい。」と言われても、おそらくほとんどの人は違和感を感じつつも「ポット」を持って来るであろう。つまり「ポ」は日本語では普通無気音であるが有気音で発音しても意味の示差性を持たないのである。

では、「e」と「ü」を練習してみましょう。

「e」は、
日本語の「エ」の唇のかたちをそのまま、
のどの奥の方から
「オ」という音を出します。

「ü」は、
日本語の「ウ」の唇のかたちを保ったままで、
「ユ」と「イ」を同時に発音します。
唇のかたちが動いて、
「ゆい」とならないように注意しましょう。22

子音 (声母)

中国語の子音は、
日本語の子音と異なった発音をするものが多いです。
ここでは特に注意すべき子音を練習してみましょう。

子音において、日本語にはない、
無気音と有気音の違いがあります。

有気音とは、発音するときに強く息を出す音です。
無気音は、意識せず、普通に発音すれば大丈夫です。

24

母音 (韻母) 2

鼻音を伴う母音

an ang en eng
in ing ian iang
uan uang uen ueng
ong iong üan ün

23

b	p	m	f
d	t	n	l
g	k	h	
j	q	x	
zh	ch	sh	r
z	c	s	

無気音 (赤)
発音するときに
あまり息を出さない。
有気音 (緑)
発音するときに
強く息を出す。

25

有気音の発音は初習中国語においては難関の一つであるので、意味の違いをもたらす、つまり有気音と無気音を間違えれば意味が伝わらない、間違った意味が伝わってしまうことをしっかりと認識させることが導入においては肝要であると考えられる。中国語の例としては「波 (bo)」と「泊 (po)」をここでは挙げている。

無気音と有気音の発音練習について付言すれば、無気音は息を抑えて発音し、有気音は息を強く出して発音するというふうな説明や教授方法が一般的であると見受けられる。それは全く間違っていないと考えるが、スライド24に示したように、無気音は意識せず普通に（日本語のように）発音し、有気音の時だけ意識して強く息を出すという解説方法は如何であろうか。統計を取っていないので正確なことを述べることはできないが、論者の経験から、中国語の教科書のように有気音を練習させるために意図的に有気音の漢字や単語を頻出させている（と思しい）場合とは違い、日常の中国語会話において有気音が登場する頻度は比較的低いと感じている。子音のうちの六音である有気音を学習者にはしっかりと覚えさせ、有気音以外は普通に発音し、有気音が出てきたときだけ意識して息を強く出すという方法は、経済的であり、有効性もあるのではないかと考える。

さて補足的に、導入としては少し難度が高いが、例えば「si」「su」「se」を発音し、それぞれ音が違う

日本語で「ポット」の「ポ」を
無気音、有気音どちらで発音しても、
ポットであることが伝わります。
ところが、無気音と有気音を区別する中国語で
「波 (bo)」を言うつもりで、
「po」と発音すれば、
「泊」の意味になってしまうのです。

si、su、seは中国語では発音が違いますが、日本語でその音を表わすとすべて「ス」になってしまいます。
つまり日本語では、これらの発音を区別しない。つまり意味の違いに影響を与えないということなのです。

26

ここで大切なことは、
日本語では「bo」「po」を区別せず、
どちらも「ポ」と発音しますが、
中国語では、それらを区別するということです。

発音を区別するということは、
意味を区別するということです。

ですから、このような点を
しっかりと身に付けないと、
正確なコミュニケーションが
できないこととなります。

27

が、日本語の仮名一文字で表記すれば全て「ス」になってしまうことを、つまりこれらの発音を聞いて日本語に表記するならば全て「ス」になってしまうこと、更に日本人には三つの発音の違いを音声的に認識しながらも音韻的には「ス」と聞こえるということを学習者とともに確認するのがよいであろう。

つまり日本語においては「ス」が中国語の「su」に近い音で発音されることが多いが、中国語の「ス」にはバリエーションがあり、それぞれ意味の違いを示すことを、学習者に認識させるのも極めて有効であろう (スライド26・27)。

畢竟、当然のことになるが、発音に区別がある場合、その発音を (意識して) 区別するということは、すなわち意味を区別するのだということを外国語学習のポイントとして伝えるべきであろう。

逆に言うならば、前掲の「ポット」の例のように、意味の示差において有気音・無気音の区別を必要としなければ、どちらで発音しようが「ポット」の意味として認知されるのである。つまり私たちは音声を聞いているようだが、正確には、意味の示差に有効な音声を聞いているに過ぎないということである。換言すれば、私たちは音声を聞き分けているのではなく、意味を聞き分けているのである⁽¹⁵⁾。

中国語では区別しますが、日本語では区別しません。

bo / po	ポ
ji / qi / zhi	チ
xi / shi	シ
zi / ze / zu / ci / ce / cu	ツ
si / se / su	ス

28

さてそのほか同様の例として、論者が説明しているのは、スライド28の通りである。

ちなみに「中国語音節表記ガイドライン [教育用] (最終調整日2011/7/21)」⁽¹⁶⁾によれば、「bo」は「ボォ」、「po」は「ポォ」、「ji」は「ジィ」、「qi」は「チィ」、「zhi」は「ヂー」、「xi」は「シィ」、「shi」は「シー」、「zi」は「ズー」、「ze」は「ヅァ」、「zu」は「ヅゥ」、「ci」は「ツー」、「ce」は「ツァ」、「cu」は「ツゥ」、「si」は「スー」、「se」は「スァ」、「su」は「スゥ」となっている。

このガイドラインは日本人学習者にとってたいへん有益であると論者は判断しており、実際に論者の授業の参考資料として配付している。本格的な学習段階になり拼音字母の発音原理や方法を学んだあと、このガイドラインを参照することは学習の大きな手助けとなる⁽¹⁷⁾。ただ論者は今、拼音字母の発音学習を全くしていない時点において、学習者たちには日本語としてはこのように聞こえる (聞こえざるを得ない)、中国語の「子音+単母音」を五十音中の一文字で表記すればこうなるということを示すために、スライド28のような表を作成したのである。

8. 声調の紹介

学習者にとって中国語の発音の習得に最も難度が高いと考えられるのは、やはり声調であろう。

声調を説明するときには、当然ではあるが、実際の声調を発音して説明することが最も明解であろう。ここでは、声調の習得が目的ではないが、日本語や英語にないような音楽的なトーンがそれぞれの漢字の発音に存在することを経験してもらうことが大切となる。学習者は、声母や韻母に係る日本語との差異以上に明確な中国語の発音の特徴を認識するであろう。

声調

声調とは、音の高低や上げ下げの調子です。声調には、次の4 (5) 種類があります。

- 第1声 高くて平らかな調子
- 第2声 低いところから急激に高くなる調子
- 第3声 低くて平らかな調子
- 第4声 高いところから急激に低くなる調子
- 轻声 本来の声調をなくしたもの

29

それでは、maという発音で練習してみましょう。

mā má mǎ mà mǎma

先ほど、発音を区別することは意味を区別することでしたね。声調も発音の一部ですから、声調が異なれば、意味が異なります。漢字が異なるのです。

mā má mǎ mà mǎma
妈 麻 马 骂 妈妈
媽 麻 馬 罵 媽媽

30

そしてここでも、声調の違いが意味の違い、漢字の違いに直結することを強調すべきである。例としては、スライド30に示したように、常套に用いられる「ma」を挙げればよいであろう。同じ「ma (マ)」でも、声調が異なれば漢字すなわち意味が異なること、つまり声調を間違えると意味が伝わらない、コミュニケーションに支障を来す危険性が大きいことを説明する。そしてこれは、前述した、発音の違いが意味の違いに繋がる、つまり私たちは音声を聞き分けているのではなく意味を聞き分けているということを、再度学習者に認識させる絶好の素材である。

なお第3声の発音であるが、昨今は、語尾を緩やかに上げず、低く抑えること（半三声）を重点として教える方法が主流であると見受けられる。論者も第1声の「高く平らか」に対して第3声は敢えて「低く平らか」という表現を用いて、低く抑えることを強調している。第3声は、その発音のあとにポーズがある場合は少し緩やかに上昇するようであるが、そのような場合は第3声が登場中に出てきて半三声となる場合（あるいは第3声が続いて第2声に声調変化する場合）に比べれば少ないと思われる。よって、実際に出現することが多い半三声を主にして教授する方が、学習において経済的であり、特に論者の教授経験上初学者が混乱をしやすい第2声との判別が、比較的困難ではなくなると考えられる。

また第2声・第4声のスライドの説明は通常とは異なると思われるが、論者が教壇で手と腕によって動作をつけて急激な調子の変化を説明するには、この表現がたいへん教授しやすい。

以上までの説明を終えたあと、スライド31のように、簡体字／日本漢字／音節の一覧を示し、まとめとする。

またスライド32のように、やはり常套の練習ではあるが「ma」による文章を練習すると、中国語独特の文章の抑揚があることを学習者に認識させることができるであろう。

说	説	shuō
广	広	guǎng
轻	軽	qīng
职	職	zhí
业	業	yè
药	薬	yào
际	際	jì
骨	骨	gǔ

31

それではお待ちかね、中国語の文章の練習です。少しの時間で、中国語が一文だけでも、話せるようになりました。素晴らしい!!!

妈妈 骂 马。
māma mà mǎ.

おかあさんが馬をどやしている。

32

9. まとめ

以上の説明で、学習者には中国語の導入的な特徴が理解されたと思われる。さらに敏感な学習者は、日本語との文法的な違いなどにも興味を抱くはずである。そこで簡単に、次のような説明をしておく（スライド33・34）。

中国語と日本語は
語順が違います。

私は学校に行きます。

我 去 学校。

主語 動詞 目的語

33

中国語には
助詞「てにをは」がありません。

中国語には
動詞・助動詞のような活用がありません。

中国語には、、、、
まだまだありますが、
これから一緒に楽しく、
学んでゆきましょう。

34

最後に前掲の内田樹氏の文書の内容とも通底するが、外国語学習において最も重要な目的であると論者が考えることがらを学習者に示す。

外国語学習は、そのことばの習得を目的とすることは当然ではあるが、ある程度の習得が達成された段階で、「外国語話者」という立場に自己を置き、そこから逆照射して母語である日本語について、外国語学習以前よりも理解を深めることが重要である。むしろここが外国語学習の醍醐味であろう。

この点がしっかりと教授者に認識されていないと、単なる大学教育は駅前の語学学校のそれと全く質的に差がないものになってしまうのである⁽¹⁸⁾。

学習する外国語はもちろん中国語に限らない。母語以外の言語であれば言語の種類を問わない。もちろん英語でも構わない。しかし昨今隆盛している英語学習においては、このような視点が少々欠落しているのではないかと、論者は案じている。英語を運用できれば事足りるということで終結してはいないだろうか。英語を運用するという点だけを目標にするというならば、合衆国やイギリスなどの英語圏においては大学生以下の幼少年、青年において既にその目標が達成されているのである。

畢竟、当然のこととはなるが、相互理解⁽¹⁹⁾のためのコミュニケーション能力が必要とされるのである。そのコミュニケーションを如何に内実を持った豊かなものにしていくか否かは、母語による知識の習得、思考の訓練、様々な経験の蓄積によるのである（以上スライド35・36・37）。そのような知識・思考・経験の場を提供するのが、語学の授業を含めた大学の講義・演習・実習であろう。語学の授業とそれ以外の講義・演習・実習が相互に有機的に関係性を持ってこそ、有効な大学教育が達成できると考えられる。

中国語について
ごく簡単にお話してきました。
中国語の特徴を知ると同時に、
日本語の特質をよく理解する
きっかけともなればよいと思います。

外国語を学ぶとは
母語(日本語)について理解を深め
ということでもあるのです。

35

そして、外国語学習においても、
コミュニケーション能力を養うことが、
最も重要です。
その外国語の運用能力を習得し、
それを使って相互に意思の疎通を行
ない、相互に理解し合うことが、
最も重要なのです。

36

最後に時間的余裕があれば、カタカナ発音によって音声を示し、コミュニケーションの初歩を練習して、導入を終わればよいと考える（スライド38以下）⁽²⁰⁾⁽²¹⁾。

以上、論者は中国語学研究者ではないが、国際文化学（*Intercultural studies*）部の教員としての中国語教育の経験から、現行の初級中国語の導入授業について記録してみた。

そのためには、
しっかりと内容のともなった発信
が必要となります。
結局は、何をどのように伝える(伝え
合う)かが、大切なのです。
伝える(伝え合う)内容を充実させる
ためには、
母語によって、様々な、
知識を身につけ、思考を訓練し、
経験を積むことが大切です。

37

それでは
最後に
簡単な中国語を
みんなで
発音してみましよう。

38

你好。ニイ ハオ
こんにちは。

大家好。
タァ チァ ハオ
みなさん、こんにちは。

老师好。
ラアオ シー ハオ
先生、こんにちは。

再见。ツァイ チェン またね。

39

大家 再见！



拜拜!!!

40

【注】

- (1) 写真は「CCライブラリーフリー素材集」 (<http://cc-library.net/>) による。 著者は、左上 (ucumari)、左下 (ehpien)、右 (Fotografik33) である。20160821最終アクセス。
- (2) 「熊猫」「龍猫」に「猫」が用いられるのは、ふさふさした体毛や長い時間の眠りが特徴的であり、また愛玩動物的な可愛さ、親しみやすさを持つことによると推測する。しかし日本人にとって一般的に熊のような大きな動物を「ネコ (cat)」の範疇で捉えることはほとんどないと考えられる。
- (3) ミシマ社、2012年。
- (4) 「中国は、多民族国家であって、漢族を含めて全部で五六の民族からなると「規定」はされている。中国の言語学者・民族学者は、その後の研究によって、今は、実は七〇種ほどあると考えている。だが、今この時に、人種と民族を強調すれば、国家分裂の危機にも迫られるということで、未だに五六種というのは大変「非科学的」だとしながらも、彼等は公然とこれを言うことはない。」 (中嶋幹起「「Chineseness」は存在するか—言語から考える」、『中国—社会と文化』12、1977年)。
- (5) もちろん学術的には正確ではない。元や清など漢民族ではない異民族王朝が長期に亘って成立していた歴史が存在している。しかしながらそのような時代にあっても、異民族の文化や思想、ここでは言語が中国を支配し漢語・漢文を一掃してしまうことはなかった。むしろ漢語・漢文が、言語や言語文化の中心であったと言ってもよい。
- (6) 例えばロシアフォルマリズムに言及するのにも、あるいはポストモダン思想を援用するのに、ロシア語、ドイツ語、フランス語などその思想の原典の言語を運用できなければならないという狂信的な語学亡者が存在するのも事実である。しかし日本語を母語とする者ならば日本語による翻訳や概説によって、その思想の急所を捉え、思考の手段としていくことは全く咎められることではない。中国の少数民族を研究するためにその言語の習得が絶対的に不可欠であるということではない、と論者は考える。
- (7) 佐藤喜代治等編集、明治書院、1996年。「中国語」は阿部兼也執筆。
- (8) 導入の授業であるので、便宜的に「旧白話」の存在を省略している。
- (9) スライド12「中国言語地図」は、橋本萬太郎氏作成。『月刊言語』1980年3月号。
- (10) 論者の経験である。あるとき山東省出身の漢族の人達と台湾の映画『悲情城市』 (侯孝賢、1989年) を見る機会があった。一人の男性は私にこれは日本語のセリフかと尋ねてきた。もうひとりの男性は内容を理解できているようだったので、台湾のことばがわかるのかと問うと、さにあらず論者と同様、日本語字幕で理解しているとのことであった。
- (11) 「共通語」と「標準語」の差異については本稿では扱わない。
- (12) より正確にはスライドの記述を清朝以前・中華民国成立当時とすべきであろう。
- (13) ダイードドリンクから発売されている「燕龍茶」には「ヤンロンチャ」のカタカナルビが振られている。理由はわからない。<https://www.dydo.co.jp/yanlong-cha/>、20160821最終アクセス。
- (14) 本来は音声ではなく音韻の問題であると考えるが、ここでは初学者への説明のために音声・発音の問

題として取り扱う。

- (15) 音声を聞き分けているのではなく、意味を聞き分けているという趣旨の文章を、小川環樹氏か尾崎雄二郎氏の書籍で読んだ記憶があるが、探し出せていない。
- (16) 「中国語音節表記ガイドライン [平凡社版] (2011年8月1日公開)」/cn.heibonsha.co.jp/、20160821最終アクセス。
- (17) ピンインのカタカナ表記の濁点については、池田巧氏「中国語には濁音がないと習ったのですが、無気音を濁音で表記しているのはなぜですか？」に対するコメントが注(16)のURLに掲載されている。論者は現在、濁音表記でもよいと考えている。
- (18) 急いで言い訳するが、論者は市井の語学学校を否定してゐるのではない。大学で語学教育はその大学の理念に即した目標を持つべきであることを述べている。
- (19) 異文化交流、異文化理解という題目の下で、理解と「寛容」が標語として掲げられることが多い。論者にとって、寛容は理解の「後」に位置する。相互に理解した上でこそ、寛容の態度が求められる。仮定の話柄として、特殊な手段によって外交関係を有利に進めようとする態度を示す国家について、その理由・現状・背景をまず理解(研究)することは必須である。しかしそれらを理解したからといって、その国家の態度を寛容するか否かは、個々人の判断に委ねられるであろう。
- (20) スライド39のカタカナ表記は、注(16)のガイドラインには従っていない。
- (21) スライド40の写真は、論者撮影による。オブジェクトはパペットパンダのシーターである。

【主要参考文献】

- ・牛島徳次ほか『中国文化叢書1 言語』(大修館書店、1967年)
- ・中国語学研究会『中国語学新辞典』(光生館、1969年)
- ・望月八十吉・高維先『中国語学習のポイント』(光生館、1970年)
- ・香坂順一『中国語学の基礎知識』(光生館、1971年)
- ・橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』(山川出版社、1983年)
- ・藤堂明保・相原茂『新訂中国語概論』(大修館書店、1985年)
- ・相原茂『はじめての中国語』(講談社現代新書、1990年)
- ・相原茂『中国語学習ハンドブック改訂版』(大修館書店、1996年)
- ・木村英樹『中国語はじめの一步』(ちくま新書、1996年)
- ・相原茂ほか『WHY?にこたえるはじめての中国語の文法書』(同学社、1996年)
- ・相原茂『中国語の学び方』(東方書店、1999年)
- ・竹内誠『はじめてみようよ中国語』(丸善ライブラリー、2002年)

(中国文学)

One Step before Elementary Chinese : A Note about an Introductory Lecture for Elementary Chinese Classes

Yoshiharu KAWAGUCHI

This paper is a note about an introductory lecture for elementary Chinese classes.

In these past 20 years, interchanges between Japan and China are proceeding exponentially, so Chinese culture and language have become more familiar to Japanese people.

But it seems that most Japanese people do not accurately know what the Chinese language is like. So in the first class of elementary Chinese, an introductory lecture about the features of Chinese is needed.

This paper describes how students can understand the features of Chinese and emphasizes what students must take care of when studying Chinese and other foreign languages.

这是一篇关于我上第一节初级汉语课时的讲座记录。

在这二十年间,日中关系有好迅速地发展过来,日本人对中国文化和汉语有的兴趣越日加深。

但是大部分的日本人没有正确地理解汉语是哪种什么样的语言。因此,第一节初级汉语课,老师应该讲解关于汉语方面的知识导论,着重介绍汉语语言上的特点。

这篇文章研究让学生们如何理解正确汉语的特点,以及强调学习汉语或其它外语时应注意的方法。